

# 生活の伝承 16

発行者 民家園のつどい  
会長 斎藤久一  
発行所 福島市五老内町3番1号  
福島市教育委員会文化課内  
民家園のつどい事務局  
TEL(024)535-1111 内線5373



よびかけうた

かつての子供たちは遊びの中でうたをうたつた。

それは、ひとりの呼びかけが仲間のみんなに伝わって合唱になつた。

線路の上を煙をはいて坂道をのぼる汽車みては叫び声をあげた。

そして、いつの間にかうたになつた。

ダツタツボッポと機関車の音に合わせて、いつの間にか

大合唱になつた。遊びがうたになつて楽しかつた。

今では、子供のうたこそ聞かれないと、

大人になつたあの頃の子供たちが、写真の三脚をかついでこのダツタツボッポを追いかけていた。

| 福島市史 別巻IV |

ダツタツボッポ  
ダツタツボッポ  
土方のばかやろ  
こだ坂こさいて  
ナンダ坂 コンナ坂

ダツタツボッポ  
ダツタツボッポ

ダツタツボッポ  
ダツタツボッポ



秋山政

数々の修行を通して村内の安全と人びとの幸福を祈つてきた。

まず、「こもり」に参加するためには「みそぎ」をして家を出る。

祈願のための「田植え」の行事が組み込まれている。

「ことば」を伝えるというのは本当なのであろうかといふことであつた。

沼神社の境内には、「羽山」よりも「松川地区の旧金沢村地内にある黒

毎年旧暦十一月十三日から一週間、神事としての「羽山」もりが行なわれてきた（現在は旧暦十一月十六日～十八日の三日間となつた。）

御承知の方が多いと思われるが、この神事は昭和五十五年一月二十八日から、重要無形民俗文化財の指定

この神事は、金沢村の人びとが古くから受け継いできた村の行事で、村の西方の羽山に祀られる羽山の神を信仰する修行であつた。「羽山ごもり」という名がある通り、参加する村の人びとは、こもり家にこもつて

「こもり家に入れば「こもり」の方式によつて修行となる。

このような組織の中で「こもり」

このことを解決してくれた事件が、この映画を作る間に起つた。

（進行は水辺の「ごさん」）といふ（）によつて身体を潔め、食事、睡眠、作業（行事の用具作り、準備など）、礼拝（「おがみ」という）などが行なわれる。

最終日には、羽山の山頂で礼拝を行ない、「羽山の神」からの託宣を受ける。

「お山かけ」という、最後の日の早朝、羽山の山上で行なわれる羽山の神からの託宣を受ける神事は、まさに神祕である。しかも、この時の羽山の神からの託宣は現在から百年近い以前からの記録が残っている。

二日目の夕食がはじまる時であつた。カシキたちが毎日してきたような手順でヤワラ（飯）を炊き、神前にお供えをするために「わん」にヤワラを盛る時であつた。カシキが鍋の蓋をとると、鍋の中のヤワラはその中央が赤黒く、丁度飯を炊いた時のコゲツキのような色になつていた

これらの神事の進行は、黒沼神社の宮祠が行ない、最後に、羽山神から託宣を受ける役目に「のりわら」があたる。この「のりわら」が羽山の神と村人との交流を行なう最も重要な役目となる。

以上のこととは「金沢の羽山」よりも  
という映画として記録されているの  
で御存じの方もあろうが、この映画  
の撮影に關係して、その報告書をま  
とめてきた私が、その報告書には記  
されてないこと、しかも、ますます

のである。しかもそれは、円形の姿であった。

キ、バツパア、オガツカア、ヨメなど  
の役目があつて、行事の進行をつ  
とめる。

◆◆◆  
されなければならない理由を心に深く  
きざんだことがあつたのである。

たちは早速「のりわら」に依頼して、結果と対策について羽山の神の託宣を受けた。

その結果は、『ヤワラを炊くまでに誤りがあった』という神の託宣であつた。

ところが、その託宣を受けた後、対策を相談しているうちに「カシキ」

の一人から突然に申し出があつて、『実は私が、このヤワラの米をとぐ時、上井戸の水でといでしまつた。』

と言い出したのである。米とぎの水は下井戸の水ですることが定められていたのであつた。

この申し出をもとにして「のりわら」を通じて「潔め」の行事を行なつて神への謝罪を行ないその行事を終わつた。

と、いうことがあつた。



この一部始終を体験した私には、この「羽山ごもり」という神事が記録として残るだけでも百年、ここに住む人びとに信仰され、伝わつてきた理由があつたと信ずることになつ

たのである。

さらに私にとつては、「羽山ごもり」の修行とは、羽山の神と金沢村の人びとの間に交わされてきた真実を最高なものとして「こもり」を

中心の行とし、修練する場を「羽山ごもり」の中に求めて今日に至つた

と認められた。

そしてこの神事が、数百年も続いてきたということの理由であると理解できた。

### 羽山ごもりののりと

天津神国津神祓い給え清めて給う

(三十三回)

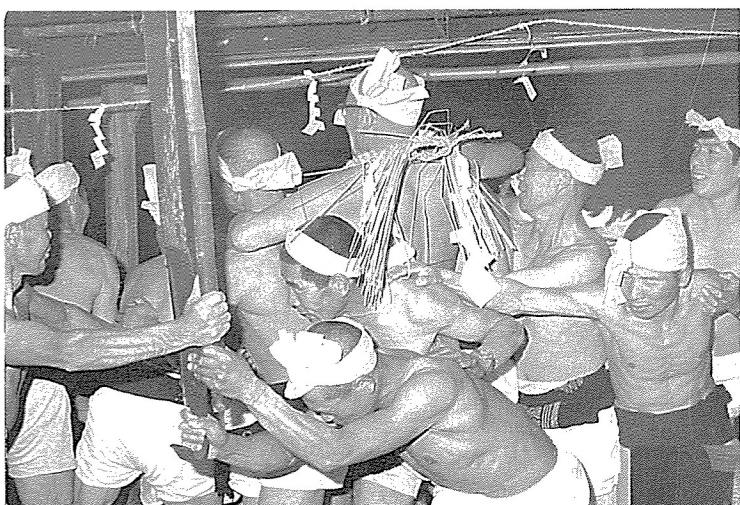
今上再拜再拜羽山の神社御前に

おろかみまつる

(三十三回奏唱)

福島の民俗 II

福島市史 別巻IVより





小正月の飾りもので人からよく「あれは何ですか」と聞かれるものがある。

福島では「大稻穂」と呼んでいる。  
大稻穂はかまど神「竈靈（へつい）」に供えるものでへつひの依代といわれている。

三本角のあるものは仏法の三宝荒神といわれ共に田植の行事に習合して餅花をつける。

古事記・神代に伊邪那美命がみまかり伊邪那岐命が悲しんで黄泉の国に呼び戻しに行つたとき「悔しきかな吾已浪泉戸喫しつ」

郎「吾はすでに黄泉の国の竈の食物を食べてしまつたので元には戻れない」といつて戻ることはなかつた。

人は食物をつくる竈に帰属することを意味することである。

婚礼のとき嫁が食べる落付餅。新生児の食い初めの儀式。同じ釜の飯を食つた仲間。一宿一飯の義理などと言うことがある。

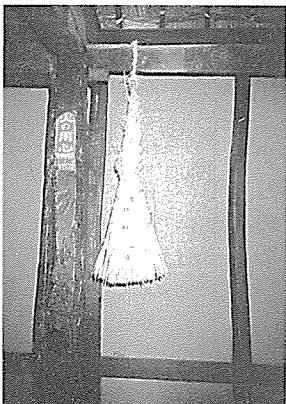
古代には戸を社会の単位とした。

福島町 宝暦十一年 巡見使案内控に福島町竈数七百九十六とある。

同じく古事記に「大年神の神裔 美豆比賣の女 奥津日女神又の名大戸比賣の神 こは諸人のもち拜く竈神ぞ」とあり、奥津日女の名から薪の燃え残つたものを燠といい火種のことを言う。

近世以降竈神は奥の祭り、主婦の司祭なりといつて、集落毎に男子禁制のおかま講の行事が続いていた。

阿部家竈幣（かまぬさ）大稻穂



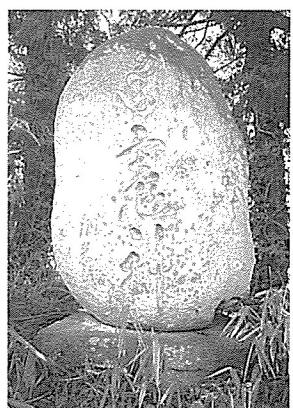
附 田植唄

「旦那様よりおかみさんが可愛い  
今朝もじやんがらいも盛りがよい」

附  
爨

かまど。飯を炊くかまど。  
おさんどんの語源となつた。

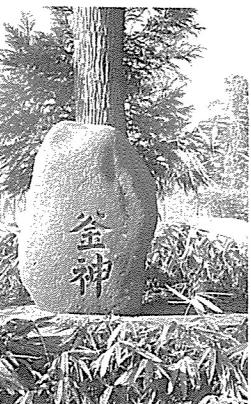
上野寺舎 道標 竈神



土船貴船神社元原ノ町 竈神塔



桜本蟹田 竈神塔



笛木野萱場山神 釜神

今各所に写真に見るような石碑が残されている。竈神、釜神、土公神、竈公神など変化がある。  
主婦は火種を消さないよう竈を守り飯を炊き、「へら持ち」として食物を分配する役目・権限を持つていた。足りない食物を工夫して、家族の年令、仕事、体調を考えて食物の加減をすることはなかなか馬鹿では勤まらないし馬鹿でなければ勤まらない。



八木田神明社 竈神



土船貴船神社 竈公神

(竈神と土公神の合体)

# 民家園、ありがとう

本英夫

私が定年退職後に引越ししたのは、福島市山口という文知摺觀音のすぐ近くである。大変環境のよい所であるので、暇にまかせて近くを散歩した。

散歩して見る所と云えば神社・仏閣ということになるが、その数の多いのにも驚いた。5万分の1の地図を買って神社・仏閣は勿論、祠、石塔の類まで書き込んでみたが、興味津々、毎日が楽しくなってきた。

たまたまもちずり地区歴史研究会

というのがあって、公民館に事務所を置く大きな団体であることもわかつた。電話して入会を申し込んだところ、快く迎え入れていただいた。

数年後、文化財指導者養成講座に推薦していただき、平成五年度から受講生となり（第V期生）、見る物聞く物皆珍しく、開眼させられた感じである。

この養成講座の修了生では民家園のつどいの会員になつた方々があるのを知り、入会する発端となつたわけである。入つてみると、つどいの

会長は斎藤久一さんである。もちずり地区歴史研究会の会長も斎藤久一さんであり、因縁を感じた次第である。

民家園にいよいよ通うことになつたが、早朝駐車場から民家園まで歩くのも気持ちが良い。並木道は両側に櫻が植えられて大きく育っている。

当たり前だが秋には葉っぱが黄色になつて落ちる。この葉っぱが家庭菜園をやつている者にはとても貴重な堆肥の原料になる。

ある年取りに行つた。きれいな広い道路いっぱいにきれいな落ち葉があるので大変取り易い。ところが、この落ち葉は利用しているらしく、取つてはダメなんだよ、と教えられた。悪いことをしたもんだと頭をかきかき引き上げた。毎年欲しいなあと思ひ乍ら歩いている。吾妻山が気の毒そうに眺めているが、此処ら運動公園は本当にきれいで良い所だ。

こうしてつどいには平成八年に入り、今年平成十七年まで九年間お世話になつた。振り返つてみると最初

の担当は客自軒である。客自軒は紅葉館と云つて下宿屋を営んでいた。私は昔、自宅が新浜町にあつたので紅葉館の静かな通りを往復したり、又酒蔵に通つたりしたものである。

ここにも因縁を感じさせられた次第である。



客自軒は今で云う割烹旅館である。

割烹旅館であれば台所は大したもののは筈である。どんなものだったのかと疑問が湧き、まずは台所をと興味が湧いた。最初の日に一通り内部を

拝見したがそれらしくない。昔々は台所なんか無くても料理は作れたのか、そんな筈はない。料理の本を見ても大したものがあるのでだから。

一つ思い出したことがある。此の頃の台所に下駄を履いた組は見たことがない。私が小さい頃は組は必ず足があつた。低い足であつたが、この足を長くすれば流しなんか要らなくなるのではなかろうか。疑問は次から次へと発展してゆく。九年たつた今でも色々と各自軒には疑問が残つたまゝだ。

年中行事として年に十五回はあるうか。正月には餅搗きがあり、搗き立てが御馳走になれる。三月には菱餅、五月には笹巻き、この笹巻きの笹も吾妻開発パイロットの方まで取りに行く。これが又楽しいことの一つである。沢山取つて一年間使うようだ。

田んぼと畑もあり農事の祭りも行われる。田植えから稲刈りも行つて農作物は行事に利用される。

行事用の御馳走は民家園だけあつ

て昔のしきたりを守つてゐる。派手さはないが素朴で味は上等だ。若い女性には昔の料理を覚えられて大変良いことだと思う。一般には忘れられているものが残されており、なつかしさが込み上げてくる。

男性陣はと云えば、午前中働いて知らないことを教えられ昔々のなつかしい御馳走が食せられる。こんな良い事はない。何故民家園のつどいに入つてゐるかと聞かれたとする。答は、なつかしくうまい昔の食事にありつけるからと答えたい。

私は今年二月に傘寿になつた。家族共々身体も弱つてきて人様に御迷惑を掛けそうだ。此処らが引っ込むチャンスだと思う。永い間楽しませてもらつた民家園よ、ありがとうございました。



## 民家園に足を運んで

石山美幸

私は小さい頃から本を読むのが好きで、その中でも昔話や昔の生活の様子を記した本をよく夢中になつて読んでいました。私が子供の頃は、ある程度現在に通じる生活様式が形成されていて、囲炉裏や機織り機といったものが普段の生活の中で実際に使われているのを見ることはほとんどありませんでした。また年中行事も地域性を感じるようなものは少なく、大部分は他の地域でも行われている内容であつたりします。

例えば、私の家では、月の初めには神棚に榦をあげて祀り、節分には豆をまき、冬至には冬至かぼちやを作り、大晦日には年越しそばを食べます。近所の神社でお祭りがあると、神輿こそありませんでしたが、境内には露店が出て子供からお年寄りまで地域に住む人達がやつて来ました。お正月には火が焚かれ、その中に御札などを納め、御神酒が参拝客に振る舞われました。

私はとつては一つ一つが大切な一年を通して、様々な行事は、私にとつては正に驚きと感動の連続でした。これまで、趣味の延長として自分で調べて知つていたものもありましたが、單に文献から得た情報と実際に行事に参加してみるとでは大違いでした!!

本来ならば、一会员として一般のお客様が行事を知つて楽しんでいたが、ただくことを第一に考えて努めていくはずなのに、私は作業の合間に『あれは何ですか?』と、周囲の人にはひつきりなしに質問していました。節句のお飾り、団子さし、

私はとつては一つ一つが大切な一年を通して、様々な行事は、私にとつては正に驚きと感動の連続でした。これまで、趣味の延長として自分で調べて知つていたものもありましたが、單に文献から得た情報と実際に行事に参加してみるとでは大違いでした!!

本来ならば、一会员として一般のお客様が行事を知つて楽しんでいたが、ただくことを第一に考えて努めていくはずなのに、私は作業の合間に『あれは何ですか?』と、周囲の人にはひつきりなしに質問していました。節句のお飾り、団子さし、

## 『風邪を引かない法』

齋 藤 久 一

それは、平成二年九月四・五日、山口にあるわが菩提松柏山常圓寺の開基四百年に当たり、曹洞宗大本山永平寺の丹羽廉芳貫主をお迎えして授戒会の大法要が修行され、翌五日貫主様が説戒のあと、折角の機会なのでお産土話として『風邪を引かない法』と題し話された。

それは、「人は誰でも朝起きたら顔を洗うでしよう。顔を洗う前にまず両手で水をすくい、その水を鼻で吸い込み鼻穴と鼻毛のゴミ（クソ）を掃除すること。それを二・三回やってから顔を洗うこと。一日一回やると風邪は引かない」ということだった。

当時貫主様は八十五才。何せ、曹洞宗の頂点に立つ目上の偉い人のお話である。偉い人の話はよく聞き、実行してみようと始めてみた。ところが、最初はむずがゆくて仕方がなかつたが、一週間もすると何の抵抗もなくやれるようになつた。そして、鼻の穴と鼻毛を綺麗にしておくと風邪を引かないのだということを知つた。

わが家の体は風邪も引き易く花粉症にも弱いので、この話をしたが実行はしていない。そこで、いろんな集まりでマスクをしている人がおると、実行者としてこの話をしている。しかし、後日聞いてみると実行している人は僅か1%にも満たない。「むずがゆい」が原因のようであるらしい。そして高い注射を打つてている。

私は「継続は力なり」で断固統ければ医者通いもなくて済むという貴重な体験者と心得自負している。お陰様で平成二年九月以来、十五年間風邪を引いたことはない。

やがて杉花粉の節がやってくる。このお鼻の掃除は花粉症にも効果あると聞いている。

風邪は万病の元、風邪を引くと肺炎を引き易い。「むずがゆい」を乗り越え、お互いマスクなしの元気な姿で、わが愛する民家園のボランティアに参加したいものと切に希望したいものである。

どんどん焼き、餅つき、七夕、そうやって少しずつ行事を行う意味や内容を理解していくにつれて、私達の住んでいる地域で一年間にこれまでほどの年中行事が行われていたのかと、改めて感動しました。

年中行事をあげればきりがあります。おそらくある程度の年数を過ごしてこられた方々にとっては当たり前に感じているもの、それどころか以前より実際に行っているものも数多くあるのではないかと思います。しかし、時代が進んでいくにつれて生活形態は変化し、やがて静かに消えてなくなってしまうかもしれない危うい可能性をもつてきます。

私は今まで自分が体験したことのなかつた様々な行事を体験して、たくさんのが感動や理解を得ることができます。ができますが、その反面、これ程にも自分が住んでいる郷土について知らなかつたのかという事実、こうやって「昔の当たり前」だつたものがなくなってしまうのかといふ寂しさなども強く感じました。

生活が便利になるのは願つてやまないことです。昔の生活が厳しく辛いものがたくさんあつたからこそ、人は少しでも改善していくこと、うと思ひ、その結果が現在の生活であると言えるのです。しかし、だからといって昔を振り返って学び、先人の心を理解して現在の私達の暮らしや生き方に反映させることを止めてはいけないと思いました。

今年度は私にとっては自らが学習する期間でした。次年度では、更に広い視野をもつて会の活動を続け、先人達が残した足跡をもつと多くの方々に知つてもらえるようにしていきたいです。そのためにも新たな情報提供や補助を考え行つていくことが今後の私の目標であり、これからも民家園に足を運び、行事に参加していきたいと思います。



## 全国文化財集落施設 ボランティア交流会開催

平成十六年十月二十八日

・場所 ホテル福島グリーンパレス

平成十六年十月二九日

・民家園見学

全国の福島市民家園と同じような集落施設で組織する協議会があり、今年度の開催地は当園でした。

加盟施設の三分の二で、ボランティアと協働して運営にあたっているため、事務局としてボランティア交流会

を呼びかけたところ、各施設より賛同

を得、他施設より計6名のボランティアさんが参加されました。

交流会は、つどい幹事の数名が役割分担して進め、翌日は協議会の事務職や学芸員と合流して園内を見学しました。秋のよい時期でもあり、脱穀や餅つきを体験しつつ、最後は元客自軒でつきたてのお餅と温かいお汁を楽しんでいただきました。

ボランティアさんからは、来年も開催したいとの声が聞かれました。来年度は岐阜県の飛騨民俗村が開催地となっています。再び、開催の運びとなりましたら、皆さんにご案内いたしますので、ぜひご参加いただきたいと思います。



28日・交流会



29日・脱穀体験